



## 外国人教師

### 後小路雅弘

アジアの近代美術の展開に果たした外国人教師の役割には、たいへん大きなものがあるが、その有り様や果たした役割は、国や地域によってさまざまである。

東南アジアにおいて、重要な役割を果たした外国人教師といえば、独立国であったタイに、政府の近代化政策によって招かれ、1933年以降国立美術学校で後進を育成したイタリア人彫刻家コッラード・フェローチが、まず挙げられるだろう。彼は、その功績によってシン・ピーラシーというタイ名を国王より賜り、タイ人として亡くなった。「タイ近代美術の父」と呼ばれ、今も大きな尊敬を集めている。自身は、フィレンツェのアカデミーで教育を受けたアカデミックな彫刻家であったが、教育に当たっては、西洋流のモダニズムと自国の伝統的な美意識を融合することの重要性を強調した。

また植民地であっても、フランス領インドシナのように、フランス人画家ヴィクトール・タルデューが1925年ハノイに西洋式のカリキュラムによる本格的な美術学校を設立した例があり、その初期の卒業生たちは、油絵や彫刻のほかに、絹絵や漆画といった独自の技法を開拓し、ベトナム近代美術の礎を築いた。タルデュー校長のほかにも、A.エーメやJ.アンガンヴェルティなどのフランス人教師たちが後進を育成した。

第二次世界大戦後になっても、1940年代から50年代にかけてインドネシアのバンドゥン工科大学（ITB）とその前身の美術学校で教鞭を執り、多くのキュビストを育てたオランダ人リス・ムルデルや、1952年クアラルンプールに設立された水曜美術会を指導した英国人画家ピーター・ハリスのもとからは、それぞれの国のモダンアートの第一世代が巣立った。

「外国人教師」といえば、アジアに滞在した欧米人を思いがちであるが、戦前戦後のシンガポールでは、中国から招かれ南洋専科美術学校を創設した林学大をはじめ張汝器など華人教師たちが大きな役割を果たした。また、戦中戦後のタイで影響力のあった日本人デザイナー、ムネ・サトミ（里見宗次）や、終戦直後からプノンペンの国立美術学校で長く教鞭をとった鈴木重成、日本軍政下のジャワで、プロパガンダ組織である啓民文化指導所の指導的立場にあったデザイナーの河野鷹思など日本人教師の役割にも無視できないものがある。



フェローチと学生たちが制作に関わった民主記念塔  
写真: 2019年4月7日後小路雅弘撮影

## 関連ワード

シン・ピーラシー